

# 光といのち

第91号  
一報恩講一  
2014年11月5日発行

発行所  
真宗大谷派勝善寺  
〒299-2214  
千葉県南房総市二部1344  
電話 0470-57-2657  
FAX 0470-57-2290

Eメールino-teyy@khaki.plala.or.jp

住職 井上孝昌

## 報恩講

十一月十五日（土）

受付 九時三十分から  
法要 十時二十分から

住職挨拶  
責任役員挨拶  
感話

西山三保子 さん  
田中 嘉一 さん

勤行  
休憩  
法話

三橋 尚伸 師  
諸連絡  
お斎（食事）

※お車は、勝善寺橋駐車場にお止めください。

釈迦の教法ましませど  
修すべき有情のなきゆえに  
さとりうるもの末法に  
一人もあらざりたまう

題字下の和讃は、80歳を過ぎた最晩年の親鸞聖人が詠まれた『正像末和讃』一一四首のうちの一首です。  
当寺の報恩講では、「正信偈」に続けて和讃を六首をお勤めしますが、その三首目です。

この和讃の大意は、「お釈迦様のお説きになった教えは遺つていけるが、教えのとおり修行し「さとり」をえる者は、末法の時代には、一人もないであろうと、お釈迦様はお説きになった」ということです。

「正像末」とは、正法・像法・末法のことです。お釈迦様が入滅されて時代が下るにしたがって、仏教は衰退するという歴史観による時代区分です。

正法は、教えのとおり修行し証する人がいる時代。

像法は、教えのとおり修行する人はいるが、証する人がいなくなる時代。

末法は、教えだけ遣り、修行する人もいなくなる時代とされています。

仏教が必要とされない末法は、「五濁悪時」、五つの濁りで満ちた悪い時代だといわれます。

以下は、参考までに「五濁」を私見で説明しました。

①劫濁、時代社会が濁り、生きる方向が定まらない時代。

②見濁、眼が濁って見えないから、自分の考えが常に正しく相手が悪いとする時代。

③煩惱濁、濁りで煩惱が煩惱だと自覚できず、欲望に振りまわされ、思いどおりにならないとすぐ怒り出す時代。

④衆生濁、人間の性質が濁り、純心でなく誠実さが無い時代。

⑤命濁、「いのち」が濁っている。つまり「人」が「物」のように扱われている時代。

「濁」は、濁り。仏法（真理）がわからない状態です。

親鸞聖人は、末法は「五濁悪時」で、お釈迦様の教えは「お経」という形で遺っているけれど、教えのとおり修行する者も、「さとる」者も一人もいないと仰っています。それは仏教を、末法に生きる私たちには、必要のない教えだと否定しているのではありません。

お釈迦様と同じように、修行や教理の研修を積み聖者となり、「さとり」を得る仏教は、末法には通用しないと仰っているのです。親鸞聖人は、その仏教を比叡山延暦寺で懸命に修学し、挫折し苦悩した方です。

その親鸞聖人を救ったのが、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という法然上人の仰せ、「浄土真宗」でした。

その時の喜びの感動をこの和讃で詠われていたので、50余年もの間、忘れることのない喜ばしかったと思えます。



『御伝鈔』は、親鸞聖人の生涯を讃える絵詞『親鸞伝絵』の詞書の部分を巻物にした上巻八段下巻七段からなる物語です。親鸞聖人の曾孫の覚如上人がお作りになりました。

「選択付属」とは、親鸞聖人が、法然上人の信心の核心が著されている『選択本願念仏集』の書写を許されたということです。さらに続いて、法然上人のお姿を图画することも許されています。

これらのことは親鸞聖人が、法然上人の教えを正しく伝える弟子として認められたということの意味し、その感動が述べられている段です。

『御絵伝』では「第六図」になります。

### 『御伝鈔』第五段 選択付属 意識

法然さまは、大ぜいのお弟子の中でも特に親鸞さまに目をかけられ、あるときはそのご著書を書写することを許されたり、あるいは、法然さまみずから南無阿弥陀仏のお名号をおかきになって与えられたこともありました。

そのことは、『教行信証』の化身土巻に親鸞さまは、感

激をもって記されているのです。「この親鸞は、建仁元年（一二〇一）に、こんな愚か者が自分の能力で目覚めることができる、などと考えていたのは、とんでもない思いあがりだったということに気がつかせていただいて、偉そうな学問、修行をすべてかなぐり捨てて、阿弥陀の親心のこめられた南無阿弥陀仏の教えに育てられる身となり、元久二年（一二〇五）法然さまのお許しを得て、先生の珠玉の教え、

『選択本願念仏集』を書き写すことができました。同じ年の七月十四日には、「選択本願念仏集」という書名と、「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」（南無阿弥陀仏こそ私のいのち。明るい生き生きとした人生は、念仏の教えに育てられて、はじめて生まれたのだ！）という言葉と、「釋綽空」という私の法名を、法然さまご自身の筆で記していただきました。

そして、その日にまた法然さまのお姿も写生することを許され、日ごろの願いをとげることができました。さらに、同じ年の七月二十九日、そのお姿に、法然さまご自身の筆で、南無阿弥陀仏の名号と、私が目覚めた人となるとき、どんな人でも、一声でも南無阿弥陀仏のみ名をとなえて、それでも

なお明るい生き生きとした人生を体験できなかつたら、誓つて私は、目覚めたなどとはいえない。この願いをたてられた法蔵菩薩ほうぞうは、今、現に目覚めた人となられ、私を明るい人生に導かれているではないか。阿弥陀如来の誓願は、決して架空の物語ではない。だれでもそのみ名をとまえ、その教えに育てられる身となれば、必ず、明るい生き生きとした人生に導かれるのだ、という、善導大師ぜんどうの教えを記していただきました。

そしてまた同じ日、夢のお告げにより、綽空という名をあらためて、善信ぜんしん、と書いていただきました。それは法然さま七十三歳のときのことでありました。

『選択本願念仏集』は、法然さまを尊敬されていた、関白かんぱく・九条兼実くじょうかねざねの願いによつて、法然さまが筆をとられたものです。そこには、真宗のかなめ、南無阿弥陀仏のところが、あますところなくおさめられています。それに、こんなにわかりやすいお念仏の書物は、ほかにありません。ほんとうに、この書物は、希に見るすぐれた教えであり、この上ない深い精神生活がこめられている、貴重な聖典なのです。

だが、長い年月のあいだに、法然さまの教えを受けた者は大ぜいおられたのですが、法然さまと、親しい、親しくない

にかかわらず、その書を拝読し、しかも書き写すことを許された者は、ほんのわずかの人たちだったのです。それなのに、今、この私は、この書を写すことを許され、その上、法然さまのお姿までえがくことができました。これはひとえに、こんな私のようなものをよみがえらせずにはおかないとはたらかける、お念仏の教えのおかげです。それはまた、私が明るい生き生きとした人生に眼を開かせていただいた記念のいきごとといつてもよいのでしょうか。だから、私は、身も心もおどるような感激をこめて、この由来を書きとめているのです」と。

（『親鸞聖人伝絵 — 御伝鈔に学ぶ —』東本願寺より）

仏教は、教えを感動をもつて聞いた人の記録として後世に伝えられてきているのです。それなのに私たちは、偉そうな理屈をふりまわして、その感動の言葉を解釈し、その生き生きとしたいのちの叫びを殺してしまっていないだろうか。先輩たちが感動した言葉に、私が何も感じないのは、私の聞法の姿勢がおかしいのではなからうか。

（『親鸞聖人伝絵 — 御伝鈔に学ぶ —』東本願寺より）

第六図



報恩講には、本堂の余間に『御絵伝』を掛けます。これは親鸞聖人のご生涯を描いた四幅二十図の絵巻物です。親鸞聖人の曾孫になる覚如上人がお作りになった聖人の伝記『御伝鈔』に対応して描かれています。

本年はその第六図を掲載しました。親鸞聖人33歳、法然上人に師事して四年後の出来事が描かれています。

右側は、法然上人から『選択本願念仏集』の書写を許され、写し終えた親鸞聖人が、その教えを後世に伝えることを託されている場面で「選択付属」と呼ばれます。

法然上人の教えに帰依した弟子は大勢いましたが、『選択本願念仏集』の書写を許されたのは、弁長・隆寛・証空・源智・長西の五人と親鸞聖人だけです。

左側は、法然上人が、「南無阿弥陀仏」の名号と「すべての人がお念仏で必ず往生する。なぜならそれは阿弥陀仏の本願であるから」という内容の銘文を、自らの真影（肖像画）に書いている場面です。

親鸞聖人は、法然上人の真影



「第六図」は右から二幅目、一番下です。

上人や親鸞聖人ら七人が流罪に処せられました。

この事件の直接原因は法然上人の一部の弟子が起こした事件によるのですが、本質的なところには、法然上人の教えが従来の仏教、自力の修行で聖者となり「さとる」聖道門の立場から認めがたいものであったからようです。

法然上人の死後のことですが、聖道門を立場にしている明恵上人が『摧邪輪』を書き、法然上人の教えには重大な過失があると非難しています。

親鸞聖人は、法然上人の恩恵をうけた者として、その非難に応じ、「末法の時代には、お念仏、他力本願」に救われる浄土門こそ時機相応の仏教である」と証明する責任がありました。その使命感から『教行信証』を撰述されたと言われます。

「正信偈」は、『教行信証』のエッセンスです。報恩講では、宗祖親鸞聖人のご苦勞を偲びつつ、ご一緒にお勤めしましょう。

※「他力本願」は、阿弥陀仏の本願です。他人まかせのことではありません